女になった僕が冒険者なのは間違っているだろうか

怜応

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リリの助けたあの日からベルとリリはダンジョンに潜っていた

潜った先でベルとリリはモンスターと戦闘になったが、そこでベルが見たのは図鑑などでも見たことがないモンスターだった

そんなモンスターを倒したベルはそのモンスターから噴霧された霧でありえない出来事をしてしまう

目次

ありえない始まり
まさかの出来事 ―――― 1
女ベルのちょっとした騒動？（1） 6
女ベルのちょっとした騒動？（2） 11
女ベルのちょっとした騒動？（3） 16
女ベルのちょっとした騒動？（4） 23
女ベルの冒険 ―――― 28
新アビリティ発現（1） ―――― 32
新アビリティ出現（2） ―――― 38

ありえない始まり
まさかの出来事

「ベル様！右前方にモンスターです！」
ベルにそう指示を出すのは小人族で茶髪の女の子リリルカ・アーデ
「わかった！」
そう言ってモンスター撃退に行くのはヘスティアファミリアの団長で白い髪と紅い瞳が特徴のベル・クラネル
「!?」
撃退にいったベルが驚いたのは今まで見たことも聞いたこともないモンスターだったからだ
（なんだ？このモンスターは？レアモンスターかな？）
そう考えたベルのとった行動は先手必勝とばっかりに敵に近づき至近距離で魔法を放った
「ファイアボルトオオオオオ!!!」
ベルがそう叫ぶと左手から稲妻を纏った炎が打ち出された

モンスターの中央を貫いたあとにベルはモンスターに近づきトドメをさそうとした瞬間だった
ブシューー
なんとモンスターが身体から霧を噴霧させた
「うわあああ!!!」
「ベル様!!」
噴霧された霧はベルにまとわりつくようにベルを覆った
リリはベルのもとへ急いで向かうとベルの身体から霧が消えたところだった
「ベル様だいじょう…」
そこでリリが見たのは小柄な少女だった
しかしその少女はベルの装備を身につけていて、髪の色も白かった
(嘘でしょ…まさか…)
そんなことをリリが考えているうちに少女は目を覚ました
「リリどうしたの?」
その少女はリリと言った
あー、当たってしまった
思い違いであってほしかった

「?」
少女は返事のないリリをじっと見ていて、流石に声をかけようとした時にリリから
「ベル様ですよね?」
「そうだけど?」
そう答えた少女は自分の声が思ったより高いことに気づいた
そして胸のあたりがきつくなっているのを感じた
「!?」
そして最後のトドメとばかりに男にはあるものがないことに触って気づいた
「うみゅ…」
「ベル様ーー!!」
リリの叫ぶ声がダンジョンに響き渡った
それから気絶しているベルをリリは肩になんとか担ぎダンジョンを出た
ベルとリリがいたのは基本的にダンジョンの入口に近い層だったこともあり早く帰ってこれた
リリはベルをギルドのソファーに寝かせるとベルの担当アドバイザーを呼ぶ為に受け付けに向かった
すると偶然ギルドの入口からベルの担当アドバイザーと思わしき人物が確認出来た

のでそちらに走った
「エイナさん!!」
「あら、貴方は確かベル君のパーティーの」
エイナと呼ばれた少女は少女というには大人びている女性と言った方がいいと思える雰囲気を思わせる人だった
それと特徴的なのは尖った耳だった
そう彼女はエルフなのだ。ただ、完璧なエルフではなく人間とエルフのハーフだ
俗に言うハーフエルフと呼ばれる種族だ
そんな彼女は自分を呼んだ小人族のリリを見て首をかしげた
「どうしたんですか?」
「そ、それが…」
「?」
要領を得ない態度に再び首をかしげるのだが、それを見たリリは連れていった方が早いと思いエイナの手をひっぱり連れていくことにした
「ついてきてください!」
「は、はい!」
気圧されるような態度に流石のエイナでも勝てなかった

されるがままにリリに連れていかれたエイナはそこで見た少女とリリから聞いたことの話にギルドに驚きの声が響いて、何事かと注目を集めそれに気づいたエイナが謝った

それから目を覚ましたベルはこれが現実ではないことを知り、絶望した顔をした

女ベルのちょっとした騒動?（1）

ベルの騒動のあの日から2日後、▪豊穣の女主人▪はいつも以上の忙しさだった
それは今日入ってきた新人の影響だ…
「ベルさーん!こっちお願いします!」
「は、はーい!」
ベルと呼ばれた少女は白い髪に紅色(ルベライト)の瞳少女だった
「ベルさんが手伝ってくれるので助かります!」
「ま、まぁー約束ですからね…」
そんなふうに言ったのは銀髪の人間(ヒューマン)のシル・フローヴァだった
「ふふふ…」
「ははは…」
いい笑顔で笑うシルとは対照的な乾いた笑顔で笑うベル…
こうなったのは2日前に遡る

あの騒動の翌日ベルはシルに弁当箱を返すために朝早くに・豊穣の女主人・を訪ねていた

だがベルは今自分がどんな状態なのかをうっかり忘れていたのである

入口から奥を覗くと、働くシルの姿が見えた

（今忙しそうだけど…）

ベルはそんな事を思い背を向けた時に後ろから声が聞こえた

「シル～、あれ白髪頭じゃないかニャ？」

ビクーーッ!!!

「あれ？ホントだ」

「でも、なんか違和感があるような？」

働いていたウェイトレス達からそんな声が聞こえてきて流石のベルも自分の状態を思い出したのである

（あ、僕今女だったんだ!?）

流石にマズいと思いホームに帰ろうとした時後ろから「ベルさん?」と声が聞こえたので止まるざるえなかったのであった

「ベルさん…ですよね?」

「……」

（ヤバイヤバイヤバイ）

冷や汗が滝のように落ち、頭の中では警鐘が鳴り響いていた

「ベルさーん?」

返事をしないベルに対し、不審に思ったのかシルは声をかけた

（ここは逃げるしかない!!）

「べ…」

「……っ!!」

ダッと走り出したベルに流石のシルも驚愕した

（すいませんシルさん…）

心の中で白い兎が土下座しながら謝っていると「待ちなさい」とガシッと肩を掴まれ

たので止まってしまった
捕まえている方に顔を向けるとそこには
エルフの特徴である尖った耳、ベルを見る綺麗な蒼色の瞳
リュー・リオンであった
「貴方?·どこかで見たことが?」
怪訝そうな顔をするリューに対し、
「そ、そうですかね?·初めてなのではー…?·」
と嘘をつく白い兎ことベル
そんな2人を遠くから眺めるシル
そんな3人の様子を遠くから眺める住民や、冒険者達…
何だかよく分からない雰囲気くらいなのはベルも感じているわけで、
「あ、あ〜そろそろ家に帰らないと〜…」
と、白々しい嘘をつく兎はもう既に涙を目に溜めていたのは想像できた
「そ、そろそろ肩を離していただけると嬉しいのですが〜…」
「すいません…」
と、掴んでいる手を離しベルに謝るリュー
「いや、いいんです!·こちらもお仕事の邪魔をしてしまったので!」

と逆に謝るベル
「ところでそれはシルの弁当箱では?」
ギクーーーッ!!!
「え、えーとー」
リューのそんな問いかけにベルはどうしたもんかとアワアワし出すと後ろから、
「ベル様〜!!」
(リリ!?)
ベルを呼ぶリリの声が、
「ベル?」
リューはベルの顔をじっと眺めて頭上に?を浮かべた
そんな間に、
「ベル様!探したんですよ!早く行きましょう!」
「ちょ、リリ落ち着いて」
そんな2人のやり取りを見てリューは、
「クラネルさん!?」
と驚きの声をあげるのだった

女ベルのちょっとした騒動？（２）

～ベルｓｉｄｅ～

「クラネルさん!?」

リューさんの驚く声を聞いてやってしまったと思った

よりにもよってこんな女の姿を知り合いに見られたのだから

「ベル様？」

（リリー！タイミング悪いよおお!!）

「あ、もしかして駄目なやつでした？」

てへっと舌を出し可愛いらしい行動に僕は（まぁ、いいか）と思い、

「クラネルさんでいいんですよね？」

そんな僕らのやり取りを見ていたリューさんはそう聞いてきた

「はい、そうです…」

僕は訳を話す為にリリを連れて▪豊穣の女主人▪に入った

「…ということがあって、今女の格好なんです」

「…そうでしたか」
「それは災難でしたね～」
　今僕はシルさんとリューさんと比べると少し小さいくらいなので自然と見上げる形になる
「…シルさん?なんか嬉しそうに見えるんですが?」
「そんなことないですよ～」
　ふふっと笑うシルさんを見るとどうにも面白がっている気がする（いや、多分そうだ！）
「ところでその小人族の方は?」
「あー、こちらはリリと言って僕の仲間です」
「リリルカ・アーデと言います。ベル様のサポーターをしています」
　ペコリと頭を下げるリリを見てリューさんとシルさんは警戒するような顔でリリを見た
「貴方はクラネルさんのナイフを奪っていた人ではないですか?」
「また何かしようとしてるんですか?」
　リューさんとシルさんの２人から圧力をかけられたリリは僕の後ろに隠れて助けを求める

「べ、ベル様～…」
　真っ青な顔でこちらを見て言うリリを見て2人にリリについて話した
　そうすると2人は「「クラネル（ベル）さんがそう言うなら」」と警戒を解いてくれた
「で、お二人はどこへ向かうおつもりだったんですか」
「じ、実は…その…なんというか……」
「「？」」
　2人は僕を見ながら怪訝そうな顔をした
　そんな僕に変わってリリが、
「女性ようの下着や服を買いに行くつもりだったんです」
「「あ～」」
　とリリの説明を聞いて2人は納得したようだった
　そうなのだ、今僕と神様のホームには僕らの服が当然ある訳だが僕の物には男物しか当然ないので買いに行こうと決めリリにも着いてきてもらったわけだ
　そこでついでにシルさんの弁当箱を返そうと思い、今に至るということだ
「まぁ、そういうことでしたか」
　とシルさんは非常に嬉しそうだった
　ん？嬉しそう？嫌な予感がする…

「ベルさん…」
「は、はい」
「私と賭けしませんか?」
　嫌な予感が的中したよ
「おー、白髪頭とシルが賭けするようニャ!」「面白そうなニャ」
　と、他の人まで注目してきて挙句にリリまで面白そうにそれを眺めていた
（助けては…くれないよね）
「ちなみに、その賭けの内容って?」
「ふふ、ベルさんにはここで1日働いてもらおうかな」
　賭けの内容としてはここのウェイトレスの猫の獣人（キャットピープル）のアーニャさんと勝負して1発でももらったら負けというルールだ
「クラネルさん、アーニャは…んぐ!?」
　リューさんが話そうとした時に後ろからシルさんが手で口を抑えた
「リュー、私たちはあっちに行ってましょうか?」
「んー!?んんー!?」
「ふふふ」
　怖い!怖いよシルさん!

結果はご存知の通り負けました、はい…
それで働いているわけです
リリは何となく察していたらしいです

女ベルのちょっとした騒動?（3）

「なんかおもろいことないかなー?」
　ぶーらぶーらと賑わう街道を歩いているのは、このオラリオで1・2のファミリアの主神の1人『ロキ』だった
「はぁ、アイズたんはダンジョン…。他の連中も鍛錬やら買い物やら…わいを1人にせんといてええ!!」
　そんなことを叫んでも今の状況に変化は訪れない
　はぁ、ともう一度ため息をつくロキに気になる話が…
『おい!豊穣の女主人が大盛況だってよ!』
『そんなんはいつも通りだろ?』
『ちげーよ、すげぇ可愛い娘がいるんだってよ!』
『まじで?』
『行ってみよーうぜ!』
『おうさ!』
　そんな男冒険者たちの話を盗み聞きしたロキは、

（これは面白そうな予感がするなぁ！）
と考えて▪豊穣の女主人▪へと足を進めた

そんな噂が経つ頃、豊穣の女主人では…
1人の少女が動き回っていた
小柄な身体でトテトテと走り回る姿は冒険者に癒しを与えた
その髪は白で、瞳は紅色といった兎を思わせる少女だった
「嬢ちゃーん、こっちに酒お願ーい！」
「わ、分かりましたぁ！」
「嬢ちゃん！こっちもだ！」

「は、は～い！」
そうその少女とはベルのことであった
「ベルさん、それが終わったら少し休憩していてください」
銀髪の少女で、ベルの今の状況の原因となった人物シルはそう言った
「や、やったぁ～…」
ベルはそう返事をしながらその場に少ししゃがみこむ
そんなベルを見てシルは微笑みながら、
「ふふふ、お疲れ様です」
そう言うのだった
リリはあの後やることがあると言ってホームに帰って行った
「あと少しだ、頑張るぞ～」
と意気込むベルにこれから起こる不運などは分からないのであった

「ほう、凄い繁盛しとるやないか…」

豊穣の女主人に来たロキは中に入った途端にその人の多さを見てそう言った
今の時刻からしてここまで溢れんばかりの人がいるのに軽く驚いた
「あ、ロキ様。いらっしゃいませ」
ロキにそう言ったシルは首をかしげながら、
「ロキ様、護衛の方は？」
「それが今連中全員用事でおらんのや」
「そうなんですか」
「せやで、だから1人で来たっちゅうわけや」
「ふふ、そうですか。席の方へ案内するんでゆっくりしてくださいね」
「おう、ありがとさん」
シルに案内された席にロキは座りながら疑問をシルに聞いてみた
「なぁ、シルたん。これはなんでここまで繁盛してるん？」
そんなロキの質問にあぁ～という感じでうなづいたシルは
「もう少しで分かりますよ」
とウィンクしながらそう言った
「シルさ～ん、手伝いますね」
「はい、お願いします」

シルが団体客に料理を運んでいるのを見てベルは手伝いに来た
「うひょ～、まじで可愛い娘じゃねぇーか」
「あ、ありがとうございます…」
一気に顔を真っ赤にするベルを見て和む冒険者たち…
そんなベルを遠くから離れた席で見ていた女神が１人いた…ロキだ
（か、可愛いいい！）
ロキは冒険者たちて笑いながら話すベルを見てそう思った
「可愛いですよね？」
「うわっとい！ビックリさせんといてやぁ、シルたん」
「ふふ、ごめんなさい」
「あぁ～、あの娘やな？」
「そうですよ」
「そりゃ納得やわ」
ロキは頷きながらベルを見る
そんなロキにシルは、
「それにもっと面白いことありますよ？」
と呟き仕事に戻った

「お嬢ちゃん、こっち注文ええか？」
「は、はい。わかりま…ってロキ様～!?」
「せやで、ロキやで」
ベルは初めてロキの存在に気づき、アワアワしだした
ロキはそれを見て怪訝そうな顔をした
「君、どこかで見たことあるような…？」
「か、勘違いでは～…」
んっ～？と唸りながらロキはベルを見た
そんなベルの後ろから店員のキャットピープルのアーニャが
「白髪頭さっさと動くニャ！最近ちょっと有名になったからって調子にのるニャよ！」
「お前はもっとだ！」
アーニャの先輩であるヒューマンのルノアが上から拳骨を落とす
(((白髪頭…有名…)))
「もしかして、君冒険者とかやってへん？」
「そ、それは…」
「そうニャ！この新人は怪物祭（モンスターフィリア）で活躍した冒険者ベル・クラネルにゃ！」
アーニャのその言葉にベルは吹き出し、アーニャはルノアにまた拳骨をもらっている

「「えええええええ!!!」」
「もうやだぁ～…」
みんなの叫びで、兎の呟きはかき消されたのだった

女ベルのちょっとした騒動？（４）

「ベル・クラネルって男やろ？君どっからどー見ても女の子…？」
　ロキはベルを見てそう言った
　ベルはその問いに苦笑しながら訳を話した
「……という事があって今女になってるんです」
「ほー、レアモンスターな…」
　ロキはあたまの中で情報を整理する
（嘘もついてないみたいやし、そもそも嘘つけそうにないしなぁ～この子）
　ロキはそんなことを思いながらベルを見る
「あ、あのロキ様？」
「ん、あぁ～ゴメンなぁ。うちの悪い癖や、気にセンといて」
「あ、はい」
　ロキは疑問に思ったことをベルに聞いてみた
「自分は戻れんかもしれんけど、大丈夫なん？」
　ベルはその問いに、

「もう割り切れましたし、神様や仲間にも助けて貰えてるので大丈夫です」
　と微笑んで返した
「そうか、なら良かったわ！」
「はい！あ、注文は？」
「あぁ～、ならこれとあれと…」
　ベルはロキの注文を聞きながら、ロキは注文するのだった

「終わったぁ…」
　ベルはカウンター席でぐったりしていた
「ベルさんお疲れ様です」
　ぐったりベルの隣に座ったのは今回の原因シルだった
「楽しかったですか？」
　シルは今回のことでベルがもう来ないんじゃないかと不安になり聞いてみた
「はい、経験出来ないようなことが出来て楽しかったです！」
　ベルの笑顔と共に言われた言葉に対してシルは

「そ、そうですか…。なら、良かったです」
　と安堵と頬赤くしながら言った
「シルさん？顔赤いですけど大丈夫ですか？」
　とベルの手がシルの額を触る
「熱はないようですね、良かったぁ～」
「……」
　笑顔のベルと赤くなるシル、その２人の光景を見ていた周りは
（（癒される～））
　と和んでいた
「お、ベルは今日は終わりなんか？」
　ベルを見て聞いたのは少し酔っていると思われるロキだった
「あ、はい。今日は帰ろうかと」
「なら一緒に飲もうや、奢るでぇ～」
「い、いやそんな！神様に奢らせるなんて…」
「そんなこと気にせんでえぇわ、ほな行こかぁ～」
「あ、ありがとうございます」
　そして２人でご飯を食べて、帰ったのであった

さすがに奢ってもらたのでとベルはロキをファミリアまで送ると言い、その言葉にロキも最初は難色を示したがベルの強い押しによって承諾した

「なぁ～、ベル?」
「はい、なんですか?」
「ベルは今楽しいか?」
ロキは前を見ながらベルにそう聞いた
そんな質問にベルは
「はい!すごく楽しいです!」
と即答した
（ほんまに、えぇ子やな…）
笑顔のベルにロキはそんなことを思い、色んなことを話しながら帰路についたのだった

「ほな、ありがとうな」
「いえいえ、こちらこそ楽しかったです」
「また何かあったらうちに来いや」

「はい、その時はお願いしますね」
と挨拶をしながら別れた
「お帰り、ロキ」
帰ってきたロキを迎えたのはロキファミリアの団長で、『勇者』の２つ名を持つ小人族…フィン・ディムナだった
「おぉ～、フィンか…。帰ってきたでぇ～」
「あちらにいたお嬢さんは？」
「あぁ～あの娘はなぁ…」
とフィンにベルの事を話し、ホームの奥へと向かった
「神様～、帰りましたぁ」
「やぁ～ベル君。待っていたぜ」
「ありがとうございます、神様」
ベルのそんな笑顔を見て、ベルの主神ヘスティアは笑顔で
「うん、お帰り！」
今日あったことを話しながら、ホームの奥に行った
２つのファミリアではベルの話題でいっぱいだったのは予想通りだった

女ベルの冒険

「ベル様今日も頑張りましょう！」
「そうだね、頑張ろうリリ！」
　そう言ってベルとリリはダンジョンに向かった

「ベル様今日はどこまで行きますか？」
「今回も前回と同じでいんじゃないかな？」
「分かりました！」
「頑張ろうね、リリ」
「はい、ベル様」
　そうしてベルとリリは歩みを進めた
　そこは異常だった
　生き物の存在を感じることが出来なかったのだ
「リリ…、何かおかしくない？」
「ベル様も思いますか？」

「うん…、今日はやめといた方がいいよね」
「そうしましょう」
（たしかあの日もこんなに感じだったな…）
ベルはアイズに助けられた日の事を思い出していた
ヴモオオオオ!!
（この声は!?なんで!?）
「べ、ベル様！この声は!?」
ベルとリリは声のした方に目を向けた
するとそこから現れたのは大きな大剣を持った『紅いミノタウロス』だった
～???～
『いたぞ！』『こいつをやれば金になる！』『倒すぞ！』
まただ、また我を殺そうとする者達だ
こいつらを殺らければ!!
そこから先は覚えていない
赤い血が舞い、血肉が飛び散った
飛び散った血肉は壁に着き、紅い花を咲かせた
目の前にあったのはただの肉塊だった

『ほう…、こいつはいいな』
そこに目を向けるといたのはバンダナを巻いた大柄の男だった
その背には2本の大剣を携えていた
『お前にしよう、壊れるなよ?』
その男からは死しか見えなかった
明確な自分の『死』…
男は背中にある大剣の1本を投げた
『それをとれ、俺を殺してみろ?』
投げられた大剣をとり、男に斬りかかった
それを見た男は笑っていた

(なんでこんな所にミノタウロスが!?)
「ベル様逃げましょう!」
(あ、脚が動かない!?動け!動け!動けぇぇぇ!!)
ミノタウロスはこちらに向かって走り、大剣を振り下ろした
「しっかりしてください!」
リリはベルに体当たりをし、ミノタウロスの一撃を避けた

大剣から出た一撃は地面を抉り、その破片を周りに飛ばした
その時にリリの頭に破片の1部が当たった
「つっ…、リリ?リリ!?」
ベルは自分の上に乗っかっているリリを見て叫んだ
「リリ!い、息は…してる。良かった…」
ミノタウロスはベル達に目を向けて歩き出した
「リリ…ごめん!」
ベルはリリを横に突き飛ばし、注意を自分に向けるために攻撃をした
「ファイアボルト!!!」
煙の向こうから無傷のミノタウロスが…
(火力が足りない!だけど…)
「お前の相手はこっちだ!来い!」
ベルはリリから遠ざける為にミノタウロスを挑発した
「ヴモモモモ!!!」
(成功だ!)
ミノタウロスとベルの戦いが始まった…
それはベルの本当の物語の始まりの1ページだった

新アビリティ発現（1）

その目に映るのは全てを捧げて戦う聖女がいた
誰かを守るために自らを投げうって戦うその姿は見る人を魅了する踊りのようだった
その戦いは後に新たな英雄（キセキ）を生んだ聖戦であった

「うぁぁぁ!!」
ミノタウロスに向かうベル
そんなベルを見て嗤うミノタウロスの戦いは誰が見ても無謀といえるものだった
「でりゃぁぁぁぁ!!」
ガイィィィィィィン!!
ぶっかり合う刃と刃は火花を散らした
「ファイアボルトォォォォォォォォ!!」
「ヴモモモ!!」
（な、なんて硬さだ!!）

ベルは驚愕していたまだ差が離れていたことに…
（僕はまた負けるのか…いや、まだだ！まだやれる！）
紅色（ルベライト）の瞳を見開き相手を見た
「でりゃぁぁぁぁ!!」

「べ、ベル様…」
リリは岩に隠されていた
「も、もしかして…」
リリは耳を澄ませて音を探すが周りには音がしなかった
（ベル様!!）
岩から出て見たのは白い髪を赤く染め、ボロボロの防具を纏うベルと傷だらけのミノタウロスだった
「べ、ベル様ぁぁ!!」
「リリ!?」
リリの声を聞きミノタウロスがリリを見る
「あっ…」

「リリ逃げて！」
　リリに突進をするミノタウロス
「リリ!!」
（こんな所で終わるの…私は…）
　思わず顔を逸らしたリリ
　ズン！
（何で衝撃が…）
　目を開くとそこにいたのはミノタウロスの突進を受け止めているベルがいた
「べ、ベル様…」
「リ、リリ…逃げて…」
「べ、ベル様…何で…」
「リリ、逃げるんだ！」
「い、嫌です！」
「早く行けよ！」
「……っ!?うわぁぁあ!!」
　逃げ出すリリを見たベルは満足そうに笑う
（あぁ、良かった）

「リリ、頑張るんだよ」
ミノタウロスを睨みながら対峙するベル
「お前の相手は僕だ！」
それに応えるように嗤うミノタウロス
第２回の戦闘が再開された

「…っ、はぁはぁ」
走るリリは奥から聞こえてくる微かな戦闘音に目を瞑り走る
（ベル様、ベル様！誰か助けて！お願い！）
「あっ!?」
どさっ！
「っつ！こ、こんな所で」
ザッザッ
リリは足音のする方に目を向ける
そこにいたのは美しい金髪の少女が立っていた
「大丈夫？」

その少女の脚を掴みながら涙した
「助けて、ベル様を助けて…」
（ベル？）
「こんな所にいたのか、アイズ」
奥から来たのは杖を持った美しいエルフだった
「リヴェリア、ここに怪我人が」
「どれ、見せてみろ」
（怪我が凄いな）
リヴェリアはリリの怪我を治しアイズから話を聞いた
「助けてか…、どうする？」
「行ってみよう」
「いいだろう」
リヴェリアはリリをかついで、走り出した
その後ろをついて行くアイズ
この出会いはベルの運命を大きく変えるのだがそれはまだ先の話…
「くっ!?」

ヘスティアナイフでミノタウロスの猛攻を流すベル
（リリは無事かな…、ごめんねリリ）
ベルの頭には自分の事より先程逃がしたリリの事で頭がいっぱいだった
（リリは無事に逃げれたかな？誰か助けてくれたらいいな、、）
ベルはリリが逃げる時間を稼ぐ為にミノタウロスへと攻撃する
（か、かたい！、、、）
ｌｅｖｅｌ１のベルの攻撃はミノタウロスの皮膚に切り傷程度にしかダメージを与えれない
（くっ、どうすれ、、ば!?）
次の瞬間ベルは壁に激突した
「かはっ、、な、何が、、」
頭から血が流れ前がよく見えない
だが、はっきり分かったのはミノタウロスは嗤っていた

新アビリティ出現（２）

リリは無事かな、、
リ、リリ、、
ーーーーー
ーーー
ーー
ー
ル、ベル、、ベル様!!
「リリ、、」
その場で体を起こしたベルはリリの姿を見て安堵した
「な、なんでここに、、」
「良かったぁ、、本当に、、」
リリの目から大粒の涙が溢れ、ベルの顔を濡らしてゆく
「あとは任せて、、」

そんなベルの元に届いた声の主はとても美しい金髪の髪を持ちオラリオで有名なアイズ・ヴァレンシュタイン
ベルの想い人だった
また助けてもらうのか、、、
また泣くだけで終わるのか、、、
誓っただろ、神様と、、、
強くなるって!!

「あなたの出番じゃない、、、」
「、、、？」
アイズはベルの方を向いて首を傾げる
「あなたはもうボロボロ、それにもう無理だとおも「勝手に決めないでください」!?」
「僕はもう臆病者やトマト野郎じゃない、僕は挑戦者だ！」
そう声をあげベルはミノタウロスに走る
「ダメ、、、！」
そんなアイズの声を無視してベルはミノタウロスと対峙する

「さぁ、冒険を始めよう!」
ベルの声をきっかけにミノタウロスとベルが同時に走り出す
怖い怖い怖い、、、でも楽しい!!
ベルの気持ちは昂っていた
まるで英雄のような物語の主人公のようで
（助けないと、、）
そしてアイズはベルを止めようとして戦闘に介入しようした時
「まぁ待てアイズ」
アイズを止めたリヴェリアだった
「なんで? 行かないと殺されちゃう、、」
「今は冒険させてやろう、なに危なくなったら私も止める」
リヴァリアはそうアイズに言い制止させた
（それに、、、今は冒険者の顔だ）
ベルの後ろ姿を見て自分でもなにを言っているのかよく分かっていなかったリヴェリアはそう思った
（若いな、、）
ふっと懐かしい気持ちになったリヴェリアはアイズを見てベルの方に目線を戻した

ーーー

ーー

ー

ベルは素早さを利用してミノタウロスの背後をヘスティアナイフで斬りつけた

（やっぱり硬い!?）

だがヘスティアナイフはミノタウロスの皮膚に少しの傷を入れただけで斬れなかった

（なら、、）

「ファイアボルトオォォォ!!!」

魔法でならと思っていたがミノタウロスの皮膚に傷すらつけれなかった

（やばい!?）

「ヴモオオオオオ」

ミノタウロスは後ろ蹴りをベルの腹に入れた

「がっ、、、！」

蹴りを喰らったベルはダンジョンの壁に向かって吹き飛ばされた

煙が上がりミノタウロスは満足そうに嗤うとベルの方へ足を向け歩き出した

自分の持つ大剣で目の前の獲物を確実に仕留める為に

ゆらゆらたちのぼる煙
その煙から飛び出したのはベルだった
「ヴモオ!?」
（こいつの皮膚は硬い、切れないなら）
「刺すまでだぁぁぁ!?」
ベルのそんな咄嗟の行動に驚いたミノタウロスは驚き行動に移せない
ベルのヘスティアナイフがミノタウロスの胸に刺さる
「ヴモオオオオ!!」
「体内からならあああ！」
ファイアボルトォォォ!!!
ヘスティアナイフから伝わった魔法はミノタウロスの体の中でみるみる膨れていき
その体を燃やし尽くした

（あぁ、なんなんだコイツは、、）

ミノタウロスは自分が死ぬのが分かりベルの姿を見る
（確かな獲物だったはずだ、なのになぜ）
ミノタウロスは考えてしまった、自分の現状をその先を、、
（あぁ、生まれ変わるならこの挑戦者ともう一度）
ミノタウロスは笑っていた
最後に自分を殺した挑戦者を眼に焼き付けて
ーーーーー
ーーー
ーー
ー
「おめでとうベル君、いい冒険をしたね」
ベットに横たわるベルの頭を撫でながらヘスティアは呟いた
それはまるで我が子の成長を見守る母親のような慈愛の顔だった
ベルは冒険譚にまた一つ英雄としての道を書き記したのだった